

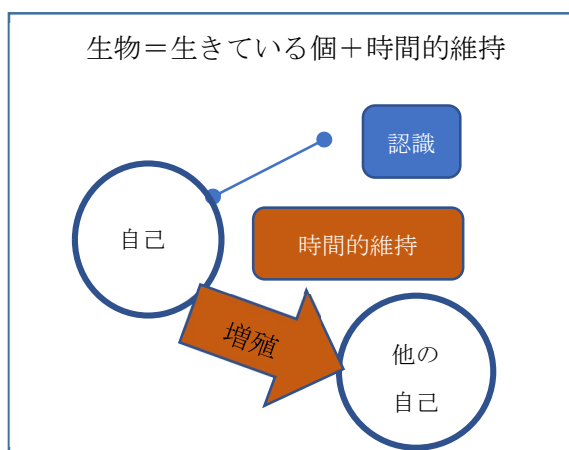
第3章 生物と進化

地球では物質的な生きている一つの個から、一つの生物になった。最初は、個を維持する為に、遺伝子を作り複製し増殖した。これは、自分との関連を強化する行為である。しかし完全にはいかない、常に関係は変化しているので、完全な関係は作り出せない。自分の複製は、完全にはできないので、進化することになる。

進化は、あらゆる方向に進化しようとするが、安定を確保できた個だけが生き残る。進化し子孫が作られるようになると、親と子の関係が出来上がる。

第3章1項 地球の生物

最初は、たんぱく質などの器官の緩い集合で、細胞も存在しない。集合の中で各器官の複製を作れるようになると、より外と内を、分けることができるようになる。細胞が出来上がる。より強い関係が出来上がる。



細胞の中で、関連は強化する方向に、働くようになった時、外からの変化の対応である認識も、安定的に機能するようになる。

生きている個としての、生物が成立する。遺伝子もできる。遺伝子は、各器官を、効率よく複製する。そして大きくなった細胞は、分割し増殖する。

生物は、変化する関係の中で、内部の安定を保つためには、増殖が必だった。その結果、進化することになった。

第3章2項 進化と脳

構造が、複雑化する方向に進化した生物は、認識を高速で伝える神経ができる。そして、認識を整理するための脳が、出来上がる。

脳は、神経を統合し、認識の中で、優先順位をつけ、統合的な活動が可能になる。そして、やらないことを決める。

思うことができるようになる。脳がある生物は、思うことができる。

第3章2項補足 脳の機能

脳では、外部刺激（外部の関係の変化）の整理と記憶などができ、外部刺激と記憶に基づいた、行動を指示する。

これは言い換えれば、行わないことを決める。関係が新たに起こった時、最初は反射

的に行動する。そして脳が介入し記憶し、新たな経験を記憶する。そして経験に基づいた行動をとる。そしてその関係が固定化すると、脳は忘れる。経験による行動は、反射的になる。

脳は、固定的な認識を忘れて、認識を反射的に行うようになる。常に変化していない認識を、忘れる組織ともいえる。

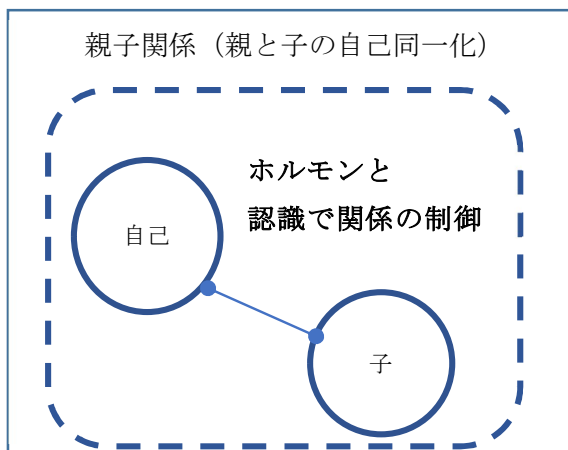
脳は常に、何かの経験の記憶を、忘れる。削除する。

関係性が常にあり、自身に影響が大きい認識（関係性が強い）は、反射的になる。認識の変化がまれで、自身の影響がないと忘れる。

この一連を主観的にとらえると、思うとゆうことになる。

第3章3項 そして親子

細胞では、分割したとき分割した細胞同士は対等になる。複雑化した生物になると、親子関係ができ始める。脳がそれを推し進めて、親子関係が完成する。



ホルモンなどの下地の上に脳は、思いの中に親子関係を、前提として成立する。

親子関係が進むと、ある程度は、子を自己同一化する。

しかし、自己同一化といっても、ある程度である。成長すれば、ホルモンなどの影響により、他者の要素が強くなる。